

「高井」第四十六号別刷

建應寺跡第一次發掘調查

中野市教育委員会



建庵寺跡第一号堂址出土御正体

1. 銅製阿弥陀如來坐像
2. 銅製觀音菩薩像
3. 銅製神像片



鏡板片 および 銅塊



建応寺跡第一号堂址礎石



発掘調査の状況

建応寺跡第一次発掘調査

中野市教育委員会

一、調査の経過

(一) 発掘までの経過

昭和五二年一一月、当委員会は市内大字間山字建応に所在する建応寺跡の緊急分布調査を実施した。その結果、標高六七〇—七一〇メートルの渓谷を開削し、寺域は五段の平坦地を造り、その面積は

およそ七〇〇〇平方メートルにおよび北側には尾根の稜線をたくみに利用して長さ一〇〇メートル巾三—一〇メートルの土器を設けていた。堂址の礎石群は三か所から発見された。寺域の広大なことや地形の状況から、このほかにも堂址が埋蔵されているものと思われた。

では区をあげて協力体制をつくってくださった。

本調査の実施見通しがついたので、いよいよ法手続をとるために、文化庁長官あてに八月二三日付をもって届出を済ませた。

(二) 調査団の構成

今回の発掘調査を成功させるため、左記のとおり調査団を構成し、それぞれの方々に、一〇月一二日に市教育委員会名でご委嘱申しあげた。

○建応寺発掘調査団の構成

調査責任者 山田芳二郎 中野市教育長
顧 問 金井喜久一郎 長野県文化財保護審議委員、信濃史

料刊行会常任編さん委員

調査団長 金井汲次日本考古学協会員、中野市文化財保護審議委員

委員、

調査員 田川幸生 日本考古学協会員、平野小学校教諭

小林軍司 中野市誌編さん協力員、

橋原長則 長野県考古学会員

金井文司 長野県考古学会員、小布施町公民館主事、

調査補助員 池田実男

調査協力員 海野桂ほか七名

調査協力団体

事務局 中野市教育委員会事務局社会教育係、

昨日に引き継ぎて発掘調査を行った。あわせて不明の礎石が少しも行う。午後も発掘調査を受けたが、雨足がしげくなりやむなく作業を中止する。参觀山田昭雄氏ほか。

一〇月二二日(日)晴

朝から熱心な発掘調査が続いた。その甲斐あってか、内陣中央右で、約三〇センチ程離れた所から今度は丈約六、五センチの仏像を

発掘、調査団員

の目は一段と輝きを増した。午

後になってさら

に仏像一体を発見、続いて鐵板

の破片と思われる銅片のかたま

りも検出、次か

ら次へと出土の

続く中で、本調

査が完全に成功

に向っているこ

とを誰しもがう

なづける喜びの一日であった。

一〇月二二日(土)くもりのち雨



第1回 国電波機知探査

参観矢野秀和君ほか。

一〇月二三日(月)晴

前日の仏像発見により、全員に調査意欲が一層高まる。昨日仏像の発見された付近を中心し精査したが、土師器片数点が発見されたのみであった。参観金井明夫氏ほか。

一〇月二四日(火)晴
仏像発見の知らせに報道関係者等が相次いで訪れる。今日も一号堂址全体にわたって、精査をした。堂址両側に新しい礎石を発見、この礎石は廻縁にあたり角石二個を並列していた。参観小池草夫氏ほか。

一〇月二五日(水)晴

午前は、未発掘と思われる箇所について発掘調査を行う。土師器片、灰釉片など発見。午後は、山からの転石を全員で片付け、堂址の規模を知るために、礎石間の測量を行う。

休憩中、村史や建応寺等にまつわる伝承が話題になり、電波探知器による調査をしてみたらということになり、水道課技術部に調査を依頼する。参観野田晴夫氏ほか。

一〇月二六日(木)晴

発掘した土を埋戻し作業を行なうとともに清掃をし史跡としての風貌を整える。午後は、水道課技術による電波探知器調査を開始する。参観黒崎利夫氏ほか。

一〇月二七日(金)くもりのち小雨

建応寺跡及び周辺一帯にわたり電波探知器三台をもって調査を行

う。疑問と思われる数か所を発見したが、これによる発掘調査は相当大規模になることが予想されたため、来年度に調査を見送ることとした。測量を月念に実施した参観鈴木正信氏ほか。

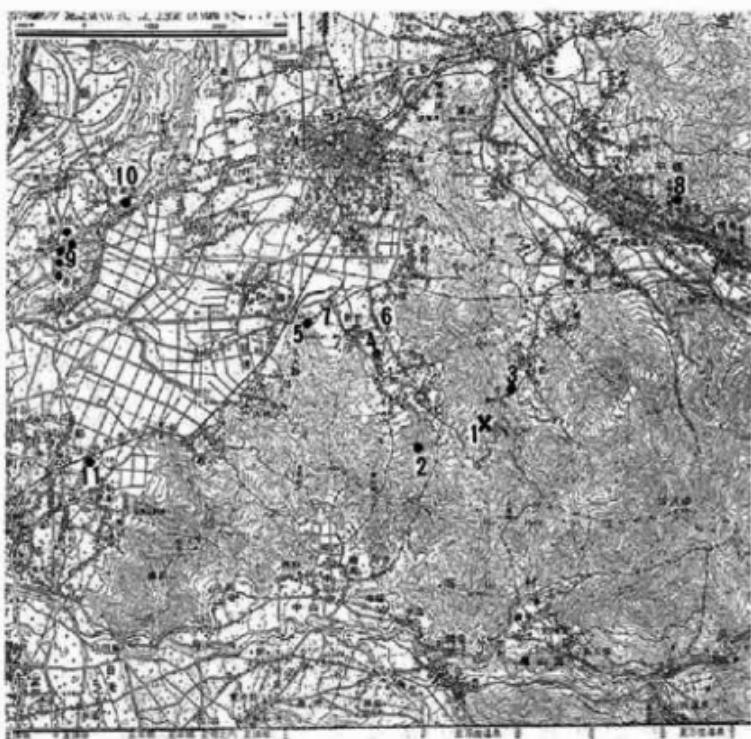
一〇月二八日(土)雨のちくもり

今回の発掘調査計画が全部終了したので、小雨であったが、現場撤去作業を行う。午後は、間山公会堂において、関係者による調査報告会とあわせて懇親会を行う。団長の金井俊次先生から詳細な報告があり、顧問の金井喜久一郎先生から約四〇分間にわたって地域の歴史関係と結びつけながら建応寺跡を考察した貴重なお話をいただいた。

このようすに今回の第一次調査は終了したが、晚秋であるにもかかわらず比較的好天に恵まれ、子期以上の成果をあげることができた。次に発掘調査に御協力くださった方々の芳名を左にかげ、感謝申しあげたい。(敬称略順不同)

中山 裕市	山林 俊文	羽片 邦義	矢野 忠良
牧野 政一	海野 福松	小林 義一	酒井 謙志
矢野 自二	古川 光夫	小林 勇男	小林 博
海野 昭二	阿部 光彦	小林 章吉	小林 恒子
黒岩 一衛	田村 義春	吉川 矢雄	春原安太郎
鈴木 正信	酒井 一	海野とらえ	海野みちこ
伊東 隆次	羽片 正人	岩戸 啓一	小林市兵衛
割田市太郎	山崎 義郎	小林 俊幸	米沢 広夫
湯本 章氏	小林 貞		

(山口 織二)



第2図 遺跡等の分布図

1. 建応寺跡 2. 真山城跡 3. 見王寺跡 4. 石動下遺跡 5. 金鎧山古墳 6. 十二川
7. 摂無瀬川 8. 弥勒石仏 9. 草間窯址群 10. 安源寺遺跡 11. 銅造觀音菩薩立像出土地

二、立地と歴史的環境

建応寺跡は間山部落の南東、雲井岳の山ふところにあって、標高約七〇〇メートル、山麓を通り林道より約七〇〇メートル上ったところにある。間山部落は三方を山に囲まれ、西北に開けた傾斜地（斜度約五・六度）である。西側する山なみの中でいちばん高いところを土地の人は剣の峯（一、一六〇）と呼んでいるが、村誌には剣の峯附近の山々を統称して雲井岳と記してある。剣の峯から西方につづく尾根は高山村との境界で北にのびる尾根は菅・佐野との境界となっている。剣の峯から東南東に三沢山（一、五〇四・六）笠岳（一、〇七五・八）と続く。これは横手山（一、三〇四・九）で西方と東北方の二つに分かれた火山脈の西方の支脈であって剣の峯から更に二つ支脈に分かれ、西方に走る支脈は山田岬附近で更に延徳と小布施方面に分岐して松川扇状地に達している。一方剣の峯から北にのびる支脈は建応の東から更科峠を経て箱山に達している。前述の都市

町村界もこの支脈に沿ったところが多い。

千曲川東岸一帯の連山は上信火山帶といわれ断層線が縱横に走つて、火山活動の年代が古く地塊運動もまた盛んであった。特に中央地塊帶に堆積した地層や岩盤の圧力で、東の連山一帯は大きく西の方に傾けられ、高くおしあげられてしまった。このため東の連山一帯の地形は複雑がひどく、岩石は変質し、山々の尾根はいくつにも分かれ西に急斜面して山の鼻先を龍の頭状地の中に突っ込んでいる。北信五岳や永峰丘陵の様のような地形とは対照的で複雑な地形になつていて、間山地蔵の地形も剣の峯から傾斜面で西に下り、分岐していくつかの尾根先が耕地に埋つていてこの複雑な地形が建心寺の伝承をはじめ谷間谷間に山に峯にいろいろな昔話がたりつがれてきたのもこのためと思われる。

間山は松川・万座川断層線、角間川断層線、と延徳・須賀川断層線に囲まれている。したがって松川や角間川、夜間瀬川のような広い流域をもつた川はないし、はつきりした扇状地もない。十二川は建

心寺跡附近より発し部落の北側を流れ下り、裾無瀬川は雲井岳内の道観山附近より発し部落の両側を流れ下り、二つの川は新野地区を流れて篠井川に合流する。二川とも水量は少く溉用に足る程度であるが、豪雨や、なが雨の時は急流岸をあらつて耕地を荒すことがある。間山から新野にかけて扇状地様に見えるのもこの川の作用と思われる。地籍内のところどころに伏流の末端ともみられる清水の湧出しているところがある。石動儀現さんの清水は著名である。

雲井岳の山ふところにある建心寺跡一帯は地味もよく植林が進んで、三・四〇年もたつかと思われる杉木立が、うつ蒼と生いしげつてある。寺跡の内で、つたえられた櫻花跡から眺める北信五岳はまた絶景である。戸隠山雲場の梵鐘と建心寺の梵鐘が共鳴したという夫婦鐘の伝説が生まれたのも、もっともなことと思われる。附近一帯にある細流は十二川の源流となつていて、

建心寺跡へ通する道は三つある。一つは間山部落から通する道、一つは北東に約二〇〇メートル程で山田から皆へ通する峠に出る。峠から昔の部落は眼下に見え、せまい山道ではあるがいまも通れる人がある。もう一つは南へ小池峠に通する古い道があつたようであるが、いずれもいまは利用されていない。新しい道としては遺跡の裏山を通る音深林道が開けたし、柳入地蔵から遺跡までの林道がいま工事中である。

こんど発掘されたところを元禄の山割の時には寺屋敷と記してある。いまも村の人は「げんのうの寺屋敷」とよんでいる。寺屋敷の西側斜面は延宝棟で仁王堂といい、數十筆の耕地になつていた。段段畠になつていていたようである。大正の頃まで寺屋敷の近くに桑畠があつた。地名として建心となつたのは明治になつてからのようにで範囲也非常に広い。

「建心寺」については伝説的に語りつたえられているだけで、間

山にある古文書にも建応寺にかかわることはすくない。村誌に記されている「建応寺古殿」のことは出典文書未詳で今後の研究調査を俟つかない。

(小林草司)

三、遺構

第一号堂址は植林された、樹令約三五年の杉、落葉松の中にあり、昭和四七年に東面の山腹に林道工事が行われた時の転石が数個と、長い年月の間に崩落した岩石があり、今回の調査でかたづけられた。林道には岩脈が露出し、火山岩の一種で小政岩下高井原地の自然石が礎石として用いられている。主柱礎石には径八〇センチ内外の石が、周縁には五〇センチ内外の石が用いられ、主な礎石は、從来より露出していたが、周縁の北側と東側が土石の崩落で埋っていて今回の調査で全体の規模を知る事が出来る様になった。西方向を正面とした堂址で、現在の峰道より一〇メートル程東側にあり、この間は特に敷石などの遺構は検出されなかった。

南側は堂址より一二米の平面をおいて、高さ約六寸の土手となつて南方に低く下段に連っている。東側は山腹面で四筋程度斜面を削りとて築造の際、利用され、下方は土石で埋っていた。北方はほぼ平面で約一六尺で次の第二堂址に連っている。

前方部より見た堂址は基壇が九〇センチ高く土盛され、周縁の礎石面とは五〇センチの高低差がある。東(東側)は地表面となつて、火燒面があり、5はやや大きい石で中央に柱あとは残り、3と共に

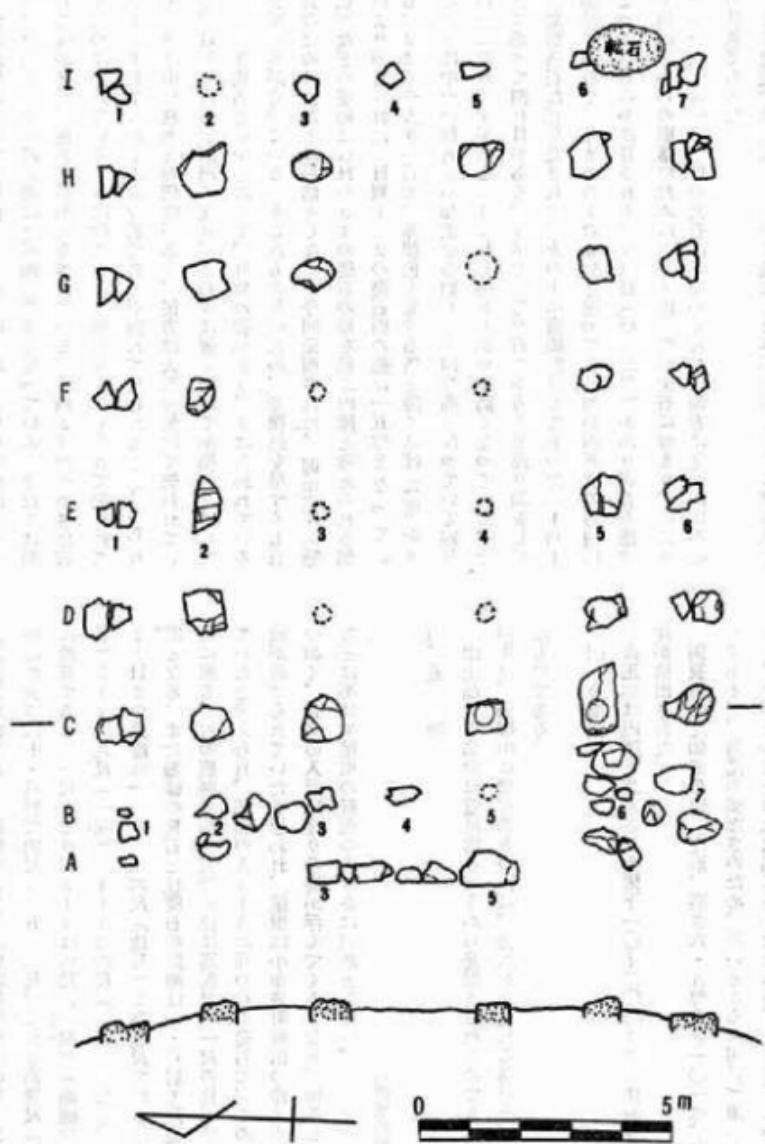
柱の礎石と考えられる。B列は植林と地盤がやわらかいためか大部分のずれている石があり、35は杉の木があり不明であるが、七個所の周縁の礎石(東)が考えられる、C列は16は周縁の東石で、CからIまでの1は全部角面を接した二個の石が並列して発見された。中央に柱をたて、柱下面の通風を図ったか、二本の柱が有ったか論議された。南面の67通りも並列していたとみられるが、埋没が浅く、石が小さかったために移動した個所もあると考えられる。

2はまわりが欠けて中央が高くなっている。3は幾筋にも割れ筋があり、4はれ筋があり、4は

三・五筋南西に移動していった石で、今回元の位置に復されたもの、中央に約三五センチの円柱のあとが残っている。5は堂址の主柱礎石の中でもっとも判然とした柱のあとを残す礎石で、火災の際、火熱面をうけ柱下面と周囲との温度差のため、



第3図 建応寺跡付近全景



第4図 第一号堂址・藏石

外面が薄片に剥げて失われ、一歩離、高くなつたりして柱面が残つた。D列1と2の礫石面は2が四〇%高くなっている。また2は割れて底があり、柱あとは半分残されている。E列2はやや小さな石で三つに割れている。5は縦に大きく割れ薄片にも割れて失われている。F列2これも小さな石であるが割れて失われたと考えられる。5手前に柱あとの円形があり、後方は大部分欠けて失われている。G列2柱あとは円く残り、まわりは薄く剥げて赤褐色を呈している。3柱あとを中心にして、無数の底があり、4は失われているが杉の木が立っている。5これも火熱のため、赤褐色を呈するも石質のために柱あとは判然としない。今回発掘された、御正体（懸仏）などの遺物はGHの3・4の礫石の隙を詰める内陣と考えられる箇所より発見された。H列1と2の礫石面の差は一五%となつていい。2はやや大きい石で、赤褐色を呈する所と薄くはげた所がある。3は中央の柱あとが加工せる如く二と四%高くなつていて四分の一は削れきすがある。4これも柱あとがやや高くなつていて、それには添つて割れ目がある。5径七〇%の石で不方まで掘り調査した結果根込石なしを見られず、土の上に直接配置してあつた。I列1選録の隅石で、今までの1の並列と違つて合せ面が四五度の方向になつてゐるのが注目される。2は杉（徑二三%）があり調査不能でI列は山からの崩落のために二五と四〇%の土石に埋まり、特に6は径一五〇×一二〇%の大石に半分かくれて、調査は完全には不可能の状態であった。

この建造物は火災にかかるて焼失した事が判明し、次に礫石間の

計測値を考察すると、建物の大きさは柱礫石前面（C列）215の中心の長さは七・八尺で曲尺で二五・二尺、これを高麗尺（無尺）に換算すると二一尺となり、213は六尺（一間）、高麗尺以下同じ）314は九尺（二間）、415は六尺（一間）となる。次にC2とH2の距離は一米、三六尺（曲尺）で高麗尺では三〇尺で五間となる。また廻縁の東石と柱礫石の距離は一・八尺で高麗尺の五尺に当る。柱の痕跡の約三五%の径は高麗尺の一尺の柱が使用されていたと考えられ、正面のA315は廟の柱の礫石で、この中に階段が設けられていたと思われ、屋根は小布施町雁田の淨光寺薬師堂の如く、薔薇の入母屋作りの姿が浮んでくる。なお、雨落しの遺構などは不明で屋根の軒先の大きさは判然としない。

（複原実験）

四、遺物

出土品の大部分は堂址内の地下から発掘されたものであるが石臼四片は、発掘中に周辺調査の折に、湧水から流れる溝のそばから得たものである。

(一) 金属遺物

御正体は内陣と想定される床下一〇×一〇%より三体および鏡板片が検出された。

銅製阿弥陀如来坐像 完形、高さ六・五%重さ一〇一% 厚手造りであるが、鋳造の拙なさのため、厚いところ（四%）薄いところ（一%）があつてその上火焔にあつたためか、左耳裏下に小さな孔

がついている。頭部から下へ四寸のところの脛部の横左右に徑一・五寸の孔があつて、鏡板へ結びつけたものと思われる。堂宇焼失の時の火肌によつて髪髮・面相・襟襷等は判然としないところがあるが温雅に感じられる。

銅製觀音菩薩坐像 ほぼ完形に近いが火災のため頭部以下は右方へいぢるしく曲り、台座の一部は欠損している。原形の高さは七・五寸程度と思われ、薄手造りで、現在の重さは二七・五磅である。後頭部には四寸の小さな柄が巾五寸で突出し、鏡板に接着させたものと思われるが鈎のため柄に孔があるか否かは不明であった。

胸前に合掌の印相は割合に明瞭であるが、宝冠、襟襷等は火肌のた



第5図 御正体実測圖(1:2)

めはつきりしない。鈎入は全く入りで手ぎわが良く面相は細く温雅にみうける。

銅製神像片 冠部のみの残欠で形態は不明であるが頭部裏には六寸の突出部があつて、厚さは二寸、中央部に三寸の一孔がある。この柄は鏡板に接着させたものと思われる。金質もよく鋲入技術も良好で、厚手造りのため火肌の影響は少ないが、全貌をうかがい知ることのできないのが惜しまれる。残欠重量は二一・七磅である。

鏡板片及び銅塊 鏡板の円面片三六点、鏡板ふち片と思われるもの六点のはか、仏像片と推定されるもの三点、火燃のため銅塊となつたものの七点が検出された。そのほか銅製の鉄器片、鉄釘一二点で大は八・五寸の長さ、小は二・三寸の長さを持つもので、このほか鉤片一点、かすがい片一点、鐵片一点でいずれも銹化が甚しい。

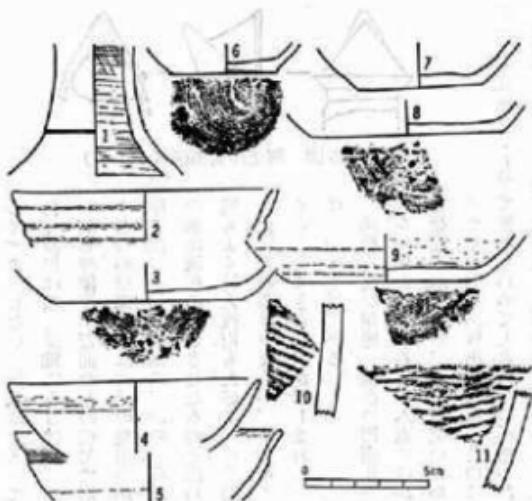
古錢片 二点、堂址内から出土し、一点は「元符」を残しているが北宋錢の元符通宝である。他の一点は銭文は不明であった。
(金井武)

(1) 土・陶器、石造、その他の遺物
土器、陶器片は統計一三点の検出をみた。そのうち土師器片

(固分期)は一〇三点であるが細片が多く復元した数はきわめて少ない。須恵器片は四点、灰陶陶器片は三点で、二点は第二号墓址付近から表掲されたものである。これ等の遺物を表示すると次のとくである。

第一表 土・陶器表

標識牌中に出土場所を記載したもののほかは第一号堂址内の地下から検出されたものである。



第6図 出土遺物実測図

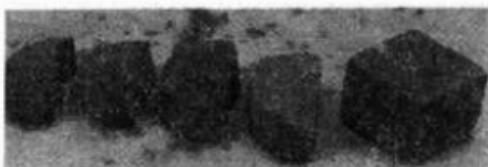
第二表
研石表

				番号	長さcm	色調	摘要	要
4	3	2	1					
3.3	4.3	7	7					
黒色	青灰色	淡褐色	乳白色					
				四面使用真				
				三面使用真				
				二面使用真				
				一面使用真				
				三面使用真				

石臼曰西点はいざれも下部曰で安山岩質石材を加工しているが、四点とも半分に割れている。第一号當址南下の湧水付近から表層採集した。

第三表 石臼表

番号	直径cm	高さcm	中心穴の大きさ	重量kg
直徑cm	30	27	31	31
部中心	11.5	13	14.5	14
部外端	10	18.5	11.5	12
直徑		2.1	2.5	3.5
深さ		3.5		5
重量	7.8	7.8	11.4	10.8
摘要	半割	下側は凹む	半割	下側は凹む
要	半割	下側は凹む	中心の穴は下まで通る	
	半割	下側に荒いノミの跡がある		
不明	火焔のため焼け条痕不			



第7圖 石 遺 物

五、むすび
長野県町村誌北信篇には「往々土をうがつに仏像或は石碑古瓦等出づるあり。」と記載され、遺物の出土例をあげてはいるが、その遺物は散逸して見ることできないのが惜しまれる。「古瓦等」の記事に注目しなければならぬが今回の調査においては検出することはできなかつたが須恵器片のことを指すものかとも思われる。

五輪塔地盤一点は愛媛県の連續東石付近から発見され漢灰岩質の石材を用いている。高さ一九、五尋半二二寸を算え、工作は念入りに仕上げている。一〇余年前に櫻原長則氏がこの付近で水輪一点を発見し、小学校へ贈られた由であるが、現在は所在が不明で惜しまれる。

打製石器(無柄)は當趾内中央部から一点発見された。昨年の調査では第三号當址付近から打製石斧片一点が表面採集され、その他の箇所では発見されていない。しかし、過去の時代の狩猟がこの地で行われたことを物語る。

と述べている。第一号堂は火災によつて焼滅したことは砲石の焼

けや、木炭片・灰等の検出によつて判明した。しかしその廢絶の時期については明確につかむ資料は存在しなかつた。ただ石造文化財は中世も相当降る時期のものであつたことから當宇戸上は中世も後

期とみたのであるが、今後の继续調査によつて究明されることであろう。

（金井義次）

